

『どついたられ』と呼ばれた男(1)

文 葛西得男

Text by Tokuo Kasai

「保育」の原点

昨年、私の父葛西健蔵が他界しました。

葬儀の中、秋篠宮両殿下、高円宮妃久子殿下からお言葉を頂戴して、人生の締め括りとしては最高であったと思われ、あたたかい気持ちになりました。

父の人生を振り返ると、戦後の動乱の中、経営者とは別にもう一つの顔を持っていました。非行少年や犯罪者を更生させることにライフワークとして取り組んだのでした。

それは、人は生まれながらにすべて平等であり、たまたま不遇な環境下に生まれた人が犯罪に手を染めてしまう事への不条理さを少しでも和らげたいという思いと、犯罪を犯してしまった人の更生を手助けしたいという心からの願いであったように思います。「どうか幸せになつて欲しい」という

願いです。

2011年11月発売 講談社 全一巻
全集『どついたられ』手塚治虫文庫

後に手塚治虫先生と出合い、手塚先生は父の生き方に感動し、父を主人公に描いた大阪を舞台にした手塚漫画の異色作『どついたられ』が生まれました。
日本国中が貧しかった

た時代、戦後の混沌とした時代を若者たちが一生懸命生き抜いていく姿、その中で人助けをしながら成長していくというような物語です。

中でも父の言葉で手塚先生が感動された「赤ちゃんを祈る」という言葉があります。

父は、赤ちゃんは純真無垢、誰もが最初は赤ちゃんで、天使のような存在であり、過去、現在、未来永劫を表すのが「赤ちゃん」という存在であるということです。その赤ちゃんを「祈る」。純真無垢な赤ちゃんが成長し犯罪を犯してしまうような境遇に陥ってしまうという人生の不条理。

父がある犯罪者の更生に関わった時、手錠に繋がれていく我が子の背に「どうか無事に」という思いからか、その母親が一心に手を合わせ、その母の姿に感動し、父も手を合わせて祈ったそうです。そうしてあげることしか出来なかつた事があつたと言っていました。しかし、やがてその犯罪者は立派に更生し社会に復帰したのだそうです。

父がよく「母親が諦めずにその子の幸せを願ってあげる心、無二の愛」という言葉を使っていました。母というのは「母のような無二の愛」を持てる存在であるという意味です。まさにそ

の「祈る」心というものの大切さを説いた父の実践から生まれた言葉でした。手塚先生はその「祈る」という無二の愛に感動されたのかも知れません。

今、日本を取り巻く環境は決して良い環境とは思われませんが、このような不確実な時代に生きる未来の子供達に強い心を持って「生き抜いていってほしい」：幸せになつてほしい」それが手塚先生と私の父の遺言だったような気がします。

Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。
1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。
1975年に帰国後、アプリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人松福会理事長に就任。松福会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アプリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。
アプリカ葛西副社長時代に国連UNEP環境計画のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。



後に手塚治虫先生と出合い、手塚先生は父の生き方に感動し、父を主人公に描いた大阪を舞台にした手塚漫画の異色作『どついたられ』が生まれました。
日本国中が貧しかった

